

## 富山県で初めて確認されたイヌの重症熱性血小板減少症候群2例のウイルス検査所見

○佐賀由美子<sup>1)</sup>、吉田俊一<sup>2)</sup>、吉田理栄子<sup>2)</sup>、畠田嵩久<sup>1)</sup>、矢澤俊輔<sup>1)</sup>、稲崎倫子<sup>1)</sup>、五十嵐笑子<sup>1)</sup>、板持雅恵<sup>1)</sup>、長谷川澄代<sup>1)</sup>、大石和徳<sup>3)</sup>、谷 英樹<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>富山県衛研ウイルス部、<sup>2)</sup>吉田動物病院（富山県）、<sup>3)</sup>富山県衛研

### 【はじめに】

重症熱性血小板減少症候群（SFTS）は、SFTS ウイルス（SFTSV）を原因とするマダニ媒介性感染症で、ヒトの致命率は約 30 %と高い。近年、SFTSV の感染様式として、発症したイヌやネコの体液を介した接触感染が報告されている。富山県では、これまでヒトおよび動物の SFTS 症例の報告はなかった。しかしながら、2022 年 5 月に県内で飼育されている同居の複数のイヌが同時に SFTS を疑う症状を呈したため、当所で検査したところ SFTSV が検出された。今回、実施したウイルス検査所見について報告する。

### 【材料および方法】

検査材料として、症例 A の 7～21 病日採取の血清、口腔スワブ、直腸スワブ、尿と症例 B の 10～22 病日採取の血清と尿を用いた。遺伝子検査はリアルタイム PCR 法で、抗体検査は間接蛍光抗体法で行った。13 病日までの遺伝子陽性の検体は、VeroE6 細胞を用いてウイルス分離を行った。

### 【結 果】

（症例 A）遺伝子検査は、血清は 7、10、13 病日陽性で 16 病日以降は陰性、口腔スワブは 13 病日陰性、直腸スワブは 13、16 病日陽性、尿は 13、16、21 病日陽性であった。尿の遺伝子量は、他の検体に比べて  $10^2 \sim 10^3$  倍程度多かった。抗体検査は、7 病日で IgM 抗体 640 倍以上、IgG 抗体 640 倍以上であった。ウイルスは 13 病日の尿からのみ分離された。

（症例 B）遺伝子検査は、血清が 10 病日陽性で 14 病日以降は陰性、尿は 22 病日陽性であった。尿の遺伝子量は、血清に比べて  $10 \sim 10^2$  倍程度多かった。抗体検査は、10 病日で IgM 抗体 10 倍未満、IgG 抗体 640 倍以上であった。ウイルスは、10 病日の血清からのみ分離された。

### 【考 察】

この 2 例の発症日は 1 日違いのため、各々が別の SFTSV 保有マダニに刺咬されて感染したと考えられた。臨床症状の消失は、症例 A で 7 病日、症例 B で 2 病日であったが、その後の検体からは最大 13 日目まで感染性のある SFTSV が検出されている。したがって、症状が消失した後も体液との接触には注意が必要である旨を飼い主に啓発する必要がある。特に、尿は他の検体に比べて多量かつ長期間に遺伝子が検出され、ウイルスも分離されたことから、その感染性に注意が必要である。また、今回の結果より、イヌの SFTSV 検査の際には、尿が検体として適している可能性があると考えられた。